

## 廬隱『海濱故人』試論

——「著述家」というセルフイメージ——

高 屋 亞 希

### 1 はじめに

中篇小説『海濱故人』<sup>(1)</sup>は、廬隱が北京女子高等師範學校に在學していた時から、卒業して自らが決めた路に進むまでの前半生を描いた自傳的作品であるとともに<sup>(2)</sup>、初期の廬隱を代表する作品である。

小説は廬隱自身をモデルとする露沙が、仲がよい宗瑩・雲青・玲玉等の學友と一緒に、夏休みを利用して海邊へ旅行し、將來の夢を語り合い友情を深める場面から始まる。そうした女性同士の固い友情關係も、それぞれが異性との交際を始め、卒業後の進路を各自定めるようになると、徐々に翳りを見せだす。友人の一人雲青は、露沙に紹介された蔚然との交際を、両親から反対されて断念して以降、その失意を胸の底に秘める。玲玉、それに露沙と最も仲がよかった宗瑩も、それぞれ異性との戀愛が始まると、もはや以前のように露沙ら友人との關係だけが、生活の全てというわけにはいかない。戀愛というあてにならないものに對して、友人たちが精神をすり減らすことへ、露沙は異議を唱えて悲嘆し、彼女たちの結婚を祝福する氣になれない。露沙自身も、既婚者の梓青との交際が周囲の反対を受け、どういう決断を下すか悩む。悩んだ末、露沙は梓青との交際を續けていくことを選び、かつて共に訪れた海邊に家を建てたという手紙を雲青に残し、友人たちの前から姿を消す。これが小説の梗概である。

読み手を困惑させるのは、露沙の戀愛に對する矛盾した行爲であろう。友人たちが戀愛にのめりこむことに對して、露沙は價値を認めておらず否定的な見解を繰り返す。にも関わらず、露沙自身は既婚者である梓青との交際を、敢然と選びとっているのだ。梓青が妻と離婚していなかったため、二人の交際は周囲から罵々たる非難をあびるが、露沙は逆に周囲の無理解を嘆き、憤ってさえている。こうした露沙の戀愛に對する矛盾した行爲を、どう解釋したらよいのだ

ろうか？

先行研究の多くは、こうした露沙の矛盾した行爲について、戀愛を渴望する感情とそれを抑制する理性が、露沙の内心で葛藤を演じていることが矛盾した行爲として現れている、と解釋する傾向にある<sup>(3)</sup>。この解釋に従うと、露沙自身の梓青との戀愛に對する肯定は、理性より戀愛感情が勝った結果ということになるだろうが、それでも問題は残る。友人に向けて繰り返し表明した己の否定的な戀愛觀に照らすと、戀愛を選ぶ自分の形象は否定されるしかない、と考えられるからだ。露沙が梓青との交際に踏み切った後も、否定的なセルフイメージを抱いていなかったことは、交際を反對する周圍に對して憤慨する、彼女の姿からも明らかであろう。しかし何故、交際を選んだ後も露沙のセルフイメージは肯定され続けたのだろうか？

本稿では先ず、露沙のセルフイメージがそもそもどのようなもので、彼女の戀愛觀とどのような関係にあるのかを分析する。更には友人や自身が異性ととの交際を経て、自分を取り巻く状況が變化していく過程で、そのセルフイメージが新たな状況にどう定位していくのか、具體的に検討していきたい。

## 2 観客というポジション

露沙は仲の良い學友と四人でグループを作っているが<sup>(4)</sup>、彼女たちのグループはそれ以外の學友たちに對する強いエリート意識で支えられている。

彼女たち何もかも異なる友人同士が、他の學友たちの誰とよりも仲がよかつたのは、なにより彼女たちがみな抱負を抱えており、あの夢うつつに日々を暮らす學友たちとは異なっていたからである。彼女たちは學友たち全員の中に、高い砦を築き隔絶していた。〔p57〕

四人の中で宗瑩は如才なく人付き合いをしており、グループ全員が學友たちの中で孤高を保ち、エリート意識を持っていたわけではないだろう。その意味では、他の學友にはない「抱負」を抱えている、というエリート意識こそが四人を結びつけている、と語る小説の敘述が登場人物の誰の視點に據ったものな

のか、慎重に取り扱う必要があると思われる。いずれにせよ、敘述が語る「抱負」の内容を、ここからは具體的に知ることができない。對比的に挙げられた學友への形容が、「夢うつつに日々を暮らす」というものであることから、目的を持って有意義な日々を送っているという露沙たちの自負が、「抱負」には含まれていることが伺える。露沙の學生生活についての描寫は、彼女が仲間以外の學友たちとどのように関わっていたのかを、明確に示している。

露沙は毎日、圖書館にだけいた。長方形の机の前に座ってペンを持ち、ぼんやりと放心。學友が通りかかるのを目にすると、やおらその學友をのんびり分析し始める。松文という學友が前方から近付いてきて、手紙を手に笑みを浮かべて読んでいた。彼女が通り過ぎてから、露沙は印象の中から彼女を取り出し、幾重にも渡って分析した。半時間後、ペンキャップをはずして小さなノートに書きつけた。“ある美しく若い女性。彼女はいつも人に微笑みかける。なんと美しい！ただ露を帯びたボタンイバラの花だけが、彼女と較べることができよう。だが最も眞實で甘い笑みはきっと、彼女が戀人からの手紙を讀んだ時、はじめて見ることができなのだ！この時彼女は、露を帯びたボタンイバラの花であるばかりか、夕陽で酔いしれ〔紅に染まる〕バラの花のようだ。淑やかで鮮やか！”〔中略〕カンカンと食事の鐘が鳴り響き、彼女〔＝露沙〕はようやくペンを置いて、圖書館から出てきた。彼女の一日の生活はおおよそこういうものだ。學友たちは皆、彼女が神経病だと言うし、幾人かの辛辣な者は彼女に“著述家”と綽名をつけた。彼女は自分を嘲笑する言葉を耳にするたびに、ただ微笑んでこう言うだけだった。“もうよしてよ！著述家だって口で言うほど簡単じゃないわ！”言い終わると、振り返りもせず圖書館へと駆けていった。  
〔p61～62〕

夏休み明け直後の、学校での日常に氣乗りがしない時期の描寫だと言うものの、學友たちを觀察し描寫することに、露沙が學生生活のかなりの時間をさいていることが分かる。「著述家」となって「偉大な作品を書く」〔p79〕ことは、露沙にとって將來の夢でもあるが<sup>(5)</sup>、興味深いのは彼女が現在すでに「著述

家」という視點でしか、學友と関わっていない點であろう。露沙は至近距離にいる相手に向かって直接呼びかけ、相手の眼差しに自らをも曝しながらその相手の應答を受け止める、といった相互的に對話を交わす関係を、學友とは一切持とうとはしていない。自分の視界を横切った相手を一度自分の記憶に沈殿させてから、今ここではない遠い過去にその相手がいるかのように對象化し、ノートに記號として固定化している。つまり露沙は、學友たちと相互的に付き合うことを拒絶し、學友たちの人間ドラマを眺める觀客として、自らを意識していることになるだろう。他の學友たちに對して抱く露沙のエリート意識が、眼前の相手を超越的な「著述家」の視點で一方的に語る、彼女の姿勢から生じたものであることが推測される。

そのような露沙に對して、他の學友たちは冷やかな視線を向けている。彼女たちが露沙につけた「著述家」という綽名は、生身の自分たちと相互的な關係を結ぼうとしないまま、自分たちを理解した氣になっている露沙への皮肉、ともとれるだろう。しかし露沙はこうした皮肉に苛立つこともなく、寧ろ意氣揚々としている。「自分を嘲笑する言葉」という記述から、學友たちの言葉が皮肉であることを、露沙が明確に理解していることが分かる。皮肉と理解した上で「微笑み」を返すのは、學友たちより自分の方が精神的に上位に立っていると考える、露沙の精神的餘裕に因るものだろう。「著述家だって口で言うほど簡単ではないわ」という科白から、學友たちの皮肉を「著述家」としての自分の能力への無理解、と把握していることが伺える。従って、學友たちを對象化する能力を持つ「著述家」というセルフイメージは、己のその能力への強い自負がこめられていたと思われる。

事實、小説冒頭部の敘述で、露沙は「世界の謎を既に見抜いているかのようだ」[p56]と紹介されており、自分の觀察力に對する自信に満ちた露沙の言葉も、小説中に繰り返し現れている。例えば、暫しの別離を経て露沙と再會した學友たちが、何氣なく「人生の離合集散には定めがない」[p66]と口にする、露沙はすぐさま自分の幼少時のエピソードを披露する。肉親の愛情に恵まれず不幸だった幼少時の、出會いと別離、再會といった體驗談を長々と語り、露沙は「人生の離合集散に定めがあるなんて、あなた方は思うの？」[p70]と締めくくる。人生や世界を「見抜いている」と考える露沙の自信は、不幸な

生い立ちによって自分が人生を肌で體驗してきた、という點を根據にしているのかもしれない<sup>6)</sup>。

それでは、露沙が抱こうとしたセルフイメージに照らした場合、自身が戀愛に關わるというのはどういう意味を持つのだろうか？

### 3 強いられた演技

學外で梓青という青年と知り合った露沙は、彼が書いた論文に興味を覺える。頻繁に手紙などで意見を交換するうちに、露沙は哲學への關心を深め、二人の關係は“表面だけの付き合いから志を同じくする深い友情へと變わ” [p71] っていく。“かつての〔物事を〕ぼんやり理解している態度を改めた” [p71] という敘述からは、露沙が梓青との交際を通じて新しい思想や哲學を學んで理論武装し、對象を明確に理解し言語化する、己の「著述家」としての能力を鍛えていく様子が伺える。露沙の意識に於いて、梓青は戀愛の相手として現れたわけではなく、共に社會を言語化し得る能力を誇るエリート同士として、彼に親近感を覺えていたに違いない。

ところが、梓青が露沙に好意を仄めかず手紙を寄こしたことで、二人の關係は變化を餘儀なくさせられる。超然と周圍を見下ろしていた露沙は、戀愛という相手との相互的な對話を要する場に否應なしに引きずり出され、自身が誇る「著述家」の眼差しを試されることになる。

快活だった露沙はそれ〔=梓青からの手紙を受け取る〕以來、やつれてしまった。元氣をなくし、人間世界に向き合うと〔世界を〕時として信じたり時として疑ったり、神経はますます鋭敏さを増した。中央公園へ散歩に行き、鐵柵の中でアヒルが泳いでいるのを見て、露沙は思った。人生はアヒルと同様に不自由で、同様に愚鈍だ。人生、いったい何をしよう？ 鸚鵡の鳴き聲を耳にして、彼女は思った。人間は鸚鵡と同様に型通りの數語を話し、同様にその籠の束縛を飛び出すことなどできはしない。 [p72]

梓青との戀愛を巡って、露沙は新たな悩みに直面している。露沙が悩むの

は、相手の愛情がどれほどのものなのか推し量る悩みでもなければ、自分が相手の想いに應えられるかどうかの悩みでもない。彼女は戀愛に關わるセルフイメージについて悩んでいるのである。鐵柵という強いられた状況の中だけで生きる「愚鈍」なアヒルと、與えられた他人の言葉を自分の言葉であるかのように喋るだけの鸚鵡。いずれの比喩からも、露沙にとって自分が戀愛に關わることは、外側から「不自由」な状況を強いられたにも關わらず、その状況を「不自由」と意識し對象化することもない「愚鈍」な自分、というセルフイメージを招いてしまうことが伺える。このイメージは、周圍の學友たちを對象化する能力を誇っていた「著述家」のセルフイメージとは、對極にあると言える。戀愛に關わるマイナスのセルフイメージをどう處理するか、ということが露沙の視界に浮上した悩みだ、と考えられよう。

ここで注意すべきは、戀愛に關わる「不自由」で「愚鈍」というセルフイメージが登場するが、このイメージ自體を露沙自身が對象化しているということは、そうした「不自由」な己の姿を眺めるもう一人の自分が設定されている、ということである。つまり露沙は、戀愛體驗に關わる當事者であると同時に、その體驗を超越的な位置から分析する觀察者でもあると言えよう。これまで露沙が誇ってきた「著述家」というセルフイメージは、このメタレベルの自己の登場によって、梓青からの告白以降も維持されていることが推測される。一方、このメタレベルの自己が戀愛に關わる己の姿をマイナスと評するために、彼と積極的に關わっていかうとする體驗は、不自由と抑制されることになるだろう。

だがそれにしても、戀愛に關わる己の姿が何故マイナスイメージで現れるのか、疑問が残る。戀愛に關わるセルフイメージが、與えられた他人の言葉をそれと意識せず、自分の言葉であるかのように繰り返す鸚鵡に擬せられていたが、他人から與えられた言葉とは何を指し、その言葉を復唱するとはどういうことなのか？ 親友の戀愛に對する露沙の批評には、彼女の戀愛觀が看取できる。親友の宗瑩が急に元氣をなくしたことに氣付いた露沙は、彼女にその理由を問いたです。宗瑩は露沙に、兩親が勧める縁談を承諾しないでいたところ、「もし自分で機會を逸したとしても、他人を恨むことは出来ない」〔p75〕と父親に注意されたことを話し、また最近新たに師旭という男性と頻繁に手紙のや

りとりがあることを告白する。換言すると、親が決めた相手と結婚することが求められる良家の令嬢が、親の保護を離れて戀愛の相手を自ら選擇し、たとえ選擇を間違えても自分で責任を負わなければならないというプレッシャーの中で、ある男性との交際が始まったということである。

“彼 [=師旭] 最初の手紙はどう書いていたの？”露沙がこう尋ねると、宗瑩が答えた。“彼の方が私と討論する問題を出してきたものだから、私は必ず返答しなければいけなくなったの。その上、論文を送ってきたから、読み終わった後は返却することになるでしょ。それが返事を書かないわけにはいかなかった原因なの。”露沙は聞き終わると、頷いて嘆いた。“現在の社交って、まず第一歩は學問の討論を名目にするわよね。その看板は實に立派なものだけど、あなたが本當に彼と學問を討論するようになると、更に人生問題の討論へ踏み込んでいく。そのうち人生問題から悲憤慷慨の感情が入った言葉をたくさん輪郭をぼかして描き出して行って、あなたの心を動かすの。その後、機に乗じて戀愛問題の方も出てこられるって寸法。……まったく芝居よね。幸い當事者は愛情が一途に深まっているからいいけど、さもなければ無味乾燥じゃない！”“全てそういうものじゃないかしら？……身を處するにも、少しばかり曖昧なままでいるほかないのよね。”と、宗瑩が言った。[p75～76]

自らの責任で相手を選択することにプレッシャーを覺えていた宗瑩にとって、師旭との交際が正しい選擇なのか全く分からない手探りの状態で、交際の場に立たされたのはひどく不安なことだったと思われる。これが、體驗を對象化する「著述家」の視線と正反對のものであることは言うまでもない。「身を處するにも、少しばかり曖昧なままでいるほかない」という宗瑩の言葉は、人生を見通すことができないことへの嘆きとも讀めるだろう。

それに對して露沙は、宗瑩が抱いていたであろう人生への不安を、共有しているとは言い難い。露沙は宗瑩から交際の経緯を聞き、それが「現在の社交」で繰り返される交際の定型でもある、と感想を述べている。この交際の定型こそ、先に露沙が否定的に語った、他人から與えられた言葉を指すのであろう。

つまり露沙にとって戀愛とは、異性と對話的に関わるのではなく、世間でもよく行われる紋切り型の戀愛という物語を、反復させられることと言えよう。つまり、己の戀愛に関わる體驗も世間の紋切り型をなぞっているだけのことだと意識することによって、俗世に墮した通俗的で「愚鈍」なセルフイメージが生じてしまうのである。實際、ここで語られた宗瑩の交際の経緯は、前述した露沙と梓青とのそれに酷似しており、露沙の脳裏では戀愛を巡る自身の體驗が想起されていたであろうことは、想像に難くない。露沙は自分と同様、宗瑩も斷固としてこの強いられた紋切り型の戀愛という物語を拒絶し、物語を反復する「愚鈍」な己を對象化する「著述家」の視線を取り戻すことを期待していた、と推測される。

しかし事態は、露沙が望む通りには進展しない。やがて宗瑩は師旭との戀愛を選び、終には結婚を決めてしまう。「著述家」というセルフイメージを自分同様に抱いてくれるものと期待していた宗瑩が、あっさりその期待を裏切った行爲として、露沙は親友の結婚を見ていたのかも知れない。結婚前夜、宗瑩やその親族等との會食に同席した露沙は、宗瑩への失望を心の内で呟く。

露沙はしげしげと觀察し、宗瑩が別人になってしまったと感じた。かつて學校にいる時は、まるで水邊の沙地にいる鷗のよう。活發で朗らかだったのが、今日は籠の中にいる鸚鵡のようだ。生氣というものが少しもない。堅くなってそこに座り、他人にじろじろ見られ、からかわれるに任せている。〔p92〕

露沙は宗瑩が別人になってしまったと嘆いている。ここでもまた鸚鵡の比喩が使われていることから、宗瑩が他人から與えられた紋切り型を復唱するだけの存在に墮した、と露沙が認識しているのが伺える。式前夜のこの會食の後、美しく着飾った宗瑩は周圍に言われるままに、祖先の位牌や兩親、親戚に叩頭の禮を行う。儀禮軌範に則ってそれを淡々とこなす宗瑩の姿を、紋切り型だと嘆いたところで仕方ないのだが、宗瑩が俗世に取り込まれてしまった象徴として、露沙は意識しているのだろう。露沙は他人に對象化され「じろじろ見られ」「からかわれる」、宗瑩の鸚鵡のような受身の姿勢をひどく嘆く。そしてそ



の鸚鵡と對置されているのが、沙地にいる鷗である。鷗についてどのようなイメージを想定しているのか描かれていないが、束縛を受けず、地上を見下ろすように悠々と自由に舞う鷗の視點が、相手を對象化する「著述家」のセルフイメージと重なることは、容易に見て取れる<sup>(7)</sup>。

客觀的に見ると、宗瑩は親の反對等の試練を乗り越え、自分が理想とする相手を己の手で選びとったのである。その意味では、寧ろ新しい時代が要求する女性像でもあった筈だが、露沙が問題とするのはその選擇が主體的なものであったか否かということではない。戀愛という紋切り型の物語との距離をとり、超然と振舞う仲間の姿が一人失われたことだけを、ひたすら嘆き悲しむのである<sup>(8)</sup>。

#### 4 演技の保留

友人たちはそれぞれ戀愛相手を見つけ、露沙と過ごす機會も次第に少なくなる。かつて仲間四人で一緒に海邊の家で超俗的な生活を送り、「著述家」となつて「偉大な作品を書く」[p79]という抱負を抱いていた露沙は、友人たちがもはや誰一人その抱負を共有しようとはしていないことに落膽する。信賴していた友人たちへの失望によって、誰も頼りにならないという認識を強めた露沙は、梓青に對してもつれなく振る舞う。

冷淡に振る舞う露沙に梓青は、二人の關係に望みがないのであればそう言つて欲しい、と悲嘆にくれた手紙を書き送る。露沙は返信で梓青を「慰め」[p90]ようとする。

實のところ、私は平生から精神生活を重んじてきました。形式の有無は全く問題ではありません。しかし世の人は本當にひどい！ 私たちのこのような行爲に對して全力を傾けて排斥し、これこそ大逆不道と考えているのです。〔彼らが〕暗に人を中傷するのには、耐え難いものがあります。私達は二人とも負けず嫌いの人間ではありますが、誰がこれに耐えられましょうか？〔世の人の中傷に〕よつて私の態度がしばしばどつちつかずであるのは、決してあなたを信じきれないのではありませんが、それが却つ

てあなたに限りない苦しみを増してしまうとは。ああ！あなたに心から赦しを請う以外、他に言うべきどんな言葉があるでしょう！ [p90]

「精神生活」が何を指すのか具体的ではないが、「平生から重んじている」という表現から、露沙が以前より持っている価値観の延長線上にあることが分かる。これまでの「私たちのこのような行爲」、即ち梓青との交際は、その「精神生活」という価値観に則って行われてきたと、露沙に認識されているのであろう。露沙は梓青と戀愛關係に陥らないように意識していたのであるから、梓青が彼女に期待するような關係ではなかったに違いない。では露沙は梓青にどのような關係を求めていたのだろうか？二人が親密になるきっかけが、梓青の著述物を通して彼の對象を鋭く言語化する能力に觸れ、露沙自らも彼と同じく哲學等に親しむようになった、というものであったことは前述した通りである。更には宗瑩等、仲がよい友人たちがいなくなった空白を埋める形で、梓青の存在が急に彼女の意識の中でクローズアップされてきたという文脈を考えると、露沙が梓青に期待していたのは、同性の友人たちと同じ役割、つまり周圍を對象化する能力を誇る「著述家」というセルフイメージを、共に支え合うことであったと考えられよう<sup>9)</sup>。

だが世間は、二人の關係を露沙が期待するようには考えない。この小説の時代設定について具体的な記述はないが、小説が書かれた1920年代初頭を背景にしていると思われる。男女が交際すること自體まだ珍しかった當時、堂々と交際する男女の姿が注目の對象となったのは勿論であるが、珍しいが故に男女が交際している姿は戀愛という關係でしか想起されなかったであろうことは、想像に難くない。異性とも同性と同じように交際しようとする露沙の思惑が、世間に理解されないのも當然と言えよう。しかも相手の梓青は既婚者で、婚姻を解消しないまま露沙と交際していたのだから、世間が二人の交際を「大逆不道」と考え、非難をあげせたのも無理はない。

更に交際相手の梓青も、露沙の思惑とは異なる期待を抱いている。恐らく露沙は梓青との交際を巡って、世間と梓青、それに自分の思惑との間で難しい舵取りを迫られていたであろう。露沙自身、世間からの中傷のせいで自分が「どっちつかず」の態度をとってしまったと言い譯しているように、世間の非難は十

分想像できるものであり、露沙は友人としての交際をも意識的に抑制していたと思われる。そして露沙自身は意識していないようだが、交際が抑制された原因はもう一つあるだろう。それは、求愛の答えを要求する梓青にどう答えるかということである。もしも露沙が梓青からの求愛を完全に拒絶した場合、身近で自分を支えてくれる友人としての梓青をも失うことになり、同性の友人たちが缺けた空白を埋めてほしい、という露沙の望みは断たれてしまう。だが空白を埋めたいがために求愛を受け入れた場合、己が戀愛に関わる否定的なセルフイメージが登場することになる。これも露沙が梓青への答えを選択しかね、「どっちつかず」の態度で梓青に接することになった原因であろう。人生のドラマを超然と眺める観客でいることに固執するが故に、ドラマの成り行きが定まるまでの露沙は、対象との距離を測りかね「この世の謎を結局見破ることができない」[p89]と嘆くばかり。目の前にいる相手と具體的にどのように関わっていくか、という主體的な選擇を保留し続ける。<sup>(10)</sup>

友人たちの結婚に加え、露沙の母親が急死。自分を支えてくれた存在がまた一人失われ、露沙は自暴自棄になって泣きじゃくる。悲しみのあまり衰弱する露沙を見かね、従妹は露沙を「慰め」[p97]て欲しいという手紙を梓青に書く。手紙を見た梓青はすぐさま、露沙のもとに駆けつける。つまり精神の據り所となる身近な存在が次々と失われる状況の中で、ただ一人自分のもとに残った梓青が、露沙にとってより大切でかけがえのない存在になったと換言できよう。ここで重要なのは、梓青を唯一人の大切なパートナーとして意識するにあたって、露沙は主體的に梓青を選び取ったわけではなく、従妹の働きかけとそれに應えた梓青によって、露沙の意圖が及ばない形で梓青が選ばれたということである。恐らく小説の書き手は、同性の友人も含めて、数多くの友人の中で梓青だけが自然に残ってしまった状況を、意圖的に設定したのでろう。

とりあえず書き手と共犯關係を結んで、小説を讀んでいく。一人自分のもとに残ってくれた梓青に對して、露沙は「感激」[p100]して「今後の歲月はただあなたのためだけに生きましょう！」[p100]と告げる。梓青は「光榮」[p100]だと思ふ反面、自分が獨身であったならば求婚しても見込みが十分であったであろう、と悔しさを覚える。この時の梓青は當然、二人の戀愛が成就したと確信していることだろう。だが梓青が考えるように、遂に露沙は戀愛と

いう関係を受け入れ、「著述家」のセルフイメージを捨てたのだろうか？二人の今後について語る露沙の言葉からは、彼女が梓青との関係を如何なるものと考えていたのかが伺える。

妻と離婚して、露沙との交際を正式なものにしようと提案する梓青に対して、露沙はその必要はないと告げ、更に續ける。

…だけど私たちが知りあい、こういう状況になったのに、絶交を申し立てるのは情を偽ることよ。幸い私は平生から精神生活を主張してきたでしょ。私たちは形式上の結びつきこそないけど、二人の心がぴたりと合うことで、もうたくさん慰めを手に入れているじゃない。しかも私は災難の後の燃えかす。結婚して他人に身を委ねる気なんてないわ。もし天が私たちの〔仲〕を絶たないのであれば、私たちは愛し合うことで、人類という海に巨大な波を翻すことができる。〔それこそ〕自ら誇りとするのに十分でもあるでしょ。〔p100〕

「愛し合う」という言葉が使われ、梓青を唯一人のパートナーとして選ぶことが確認され、二人の間には遂に戀愛關係が成立したように見える。しかし、梓青を最も身近にいる知己と認定したことを除くと、露沙が言っていることはこれまでと変わっていないことに気付く。露沙はここでも、自分たちの交際が「精神生活」に則って行われてきていると主張している。先に「精神生活」に基づく關係を、周圍を對象化する能力を誇る「著述家」というセルフイメージを支え合う關係と想定したが、露沙が依然として「著述家」のセルフイメージを誇っていることが推測される。また注目されるのは、露沙が「形式上の結びつき」、即ち結婚という社會的に認可された關係を選ばず、梓青に既婚者のままでいることを積極的に求め、今後その状況で交際していくことをも「精神生活」と意識している点である。つまり露沙の意識では、結婚というゴールを目指す關係でない以上、二人が互いを唯一の知己と認め合ったとしても、それはいわゆる戀愛關係ではなく、これまで通り親友として「精神生活」に基づく交際を續けていくことが可能だ、と考えていたことになるだろう<sup>(4)</sup>。求愛を拒絶して別れるつもりもないが、求愛を完全に受け入れて結婚するつもりもな

い、「どっちつかず」の状況。世間や梓青に誤解を與えかねないこの危うい状況をこそ、露沙は「精神生活」であるとし、敢然と選んでいたことになる。

興味深いのは、親友としての交際を續けることが露沙に選擇されたため、交際を非難する世間が明確に對象化され、「著述家」としての彼女の眼差しに曝されるようになったことである。ここでの露沙は、二人の交際が世間という海に「巨大な波を翻す」、即ち世間の非難中傷を巻き起こすことができるのを、嘆くどころか逆に誇りにしている。ここからは社會に貢獻するという露沙の自負心が看取できるが、たぶん世間の無理解に立ち向かう己のセルフイメージが想定され、それに立ち向かい戦うことこそが社會に新しい道を切り開き、社會貢獻に繋がると意識されているのだろう。これが超俗的な視點から相手を一方的に對象化する、「著述家」のセルフイメージに重なることは言うまでもない。梓青と交際していくことを選ぶという新たな状況の中で、周圍を對象化する「著述家」の眼差しはこのような形で定位し、維持されていくことになる。

## 5 おわりに

誰の目にも、二人は不倫の戀愛關係にあるようにしか見えない。にも関わらず露沙だけは、自分たちの超俗的な交際こそが社會への貢獻であると、エリートとしての自負を抱き、梓青に連帶感を覺えていたのだろう。梓青が事業を興すために一人で上海へ行く際にも、彼が「將來發展するチャンス」[p105] と考え、露沙は己の寂しさを抑えて彼を送り出す。しかし數ヶ月後、梓青は別れて暮らす露沙が氣がかりで仕事に身が入らないと訴え、露沙は梓青との關係をどうするか再び選擇を迫られる。

露沙がどのような選擇をしたのか、小説中には明確な記述はなく、友人の雲青宛に一通の手紙を残し消息を斷ったことだけが書かれている。雲青宛の手紙に、梓青との愛情が神聖なものであると言及した後、世間の非難を嘆く言葉が出てくることから、露沙がこれまでと同様の關係、即ち敢えて梓青の婚姻を解消せず、「精神」で結ばれた友人同士として交際していくことを選擇したことが伺える。また消息を斷ったというのは北京での生活を清算したことであろうから、露沙は上海へ行き梓青との同棲生活を始めたと推測される。

周囲から前途洋々と見られていた露沙が、交際相手の求めに應じ北京で自ら築き上げた生活を捨て、上海で同棲生活を始める。そうした露沙の姿は、男の都合に自分をあわせて生きる古風な女にも見えてしまう。だがこれは飽くまでも周囲が見る露沙の姿であって、彼女自身の認識ではない。彼女は依然として、周囲を超俗的な立場から眺める「著述家」というセルフイメージを持って、世間と對峙し続けたことだろう。以前共に遊んだ海邊に家を建て、それを仲間たちに手紙で知らせたのも、自分だけはかつての抱負を忘れていない、というメッセージであったと思われる。

露沙が消息を断ってから一年後、玲玉と雲青等の友人たちはその海邊を訪れる。件の家に「海濱故人」と書かれた額が掲げられているのを見た友人たちは、音信不通の「海濱故人」、即ち露沙への思いを強くし<sup>(12)</sup>、彼女と二度と會えないのではと心を傷める。邊りが暗くなり歸途につく間際、またいつ會えることかと友人の一人雲青が呟き、小説は終わる。正式の結婚に敢えて背を向けて同棲に踏み切った露沙のことを、友人たちがどう思っていたのか、小説には書かれていない。夕闇が包み込む海の黒い廣がり为背景に、沙地に舞う白い鷗の幻影。露沙が友人たちに己をそう見てほしいと、心の内で願っていたことだけは確かであろう。

## 註

- (1) 『海濱故人』は1923年、『小説月報』14巻10・12期に掲載された。その後1925年7月に商務印書館から單行本を刊行。本稿では『廬隱小説全集』（時代文藝出版社、1997年3月）を使用した。
- (2) 廬隱自身は、師範學校入學以前から自ら婚約を決めた相手がいしたが、在學中に北京大學生の郭夢良と交際するようになり、その婚約を破棄している。郭夢良は既婚者で、二人の交際は世間の非難を受けるが、1923年に郭の婚姻を解消しないまま、上海で學式し結婚生活を始めている。肖鳳『廬隱 李唯建』【『名人情結』叢書】（中國青年出版社、1995年1月）等参照。『海濱故人』は廬隱の自傳的小説ではあるが、例えばこの婚約破棄の顛末についての言及は全くない。また『廬隱自傳』（1934年）と較べても、女子高等師範學校での學生生活についてディテールがかなり缺落している印象を受ける。『海濱故人』を自傳的な小説として論じる際には、既婚者である郭夢良との交際で非難を受けていた廬隱が、露沙の形象を借りて、世間に向けて自分をいかに見せようとしていたか、という點への配慮が必要だと思われる。
- (3) 廬隱の小説に於いて、戀愛を抑制する「智」と戀愛へひかれる「情」が對立的に

描かれることについては、廬隱について論じる多くの先行研究が言及している。例えば劉思謙『“娜拉”言說——中國現代女性作家心路紀程』(上海文藝出版社、1993年12月)は、そこにフロイトの言う「現實原則」と「快樂原則」の對立を見ている。

- (4) 本稿では四人と便宜的に記述を統一したが、他に蓮裳を加えて五人グループで登場する場面も、小説中には數カ所見られる。この海邊に行く場面も五人で登場している。ただ國文専攻で哲學的な議論が好きな四人とは異なり、蓮裳は一人だけ音楽専攻で、しかも哲學的議論を好まないため、四人ほど一緒に行動しないことが小説中に記されている。
- (5) 宗瑩と露沙は著述家、雲青と玲玉は教師となつて、一緒に海邊で家を建てて暮らす夢を、四人の雑談で語っていたことが、露沙の手紙の記述から伺える。四人が折に觸れて、將來一緒に暮らすという夢を互いに確認する場面が、小説中に散見される。尙、「著述家」の原文は「著作家」となっている。
- (6) 廬隱が小説に於いて、悲觀的な人生觀を繰り返して表明していることについて、彼女の不幸な生い立ちとの關係を指摘する先行研究は多い。例えば中本百合枝「廬隱 日記體の小説が意味するもの」(慶應義塾大學藝文學會『藝文研究』60號、1992年3月)等参照のこと。
- (7) 「沙鷗」のイメージについては、傳統的な詩文で用いられる典故を考える必要があるかも知れない。『列子』黃帝篇に見える、人の企みを見ぬいて地上に下りてこよとしない鷗の逸話や、杜甫「旅夜書懷」詩の「沙鷗」に重ねられた孤高の士のイメージ等、浮世を超俗的な視點から眺める「著述家」のイメージと非常に似ている。
- (8) 北京女子高等師範學校在學中、廬隱等と共に四公子と稱され、宗瑩のモデルとなつた程俊英は、『海濱故人』に描かれた四人の交友を、宗瑩の視點から再構成した小説『女生・婦人』(上海文藝出版社、1995年8月)を蔣麗萍と共著で出している。宗瑩から見た露沙は、世間に配慮しながら自分の夢を實現させていくというのとは無縁で、誰からも反對されるような戀愛相手を選んで、反對されると意固地になる形象として描かれている。飽く迄も小説であり、傳記資料として讀むことには慎重でありたいが、露沙の視點で書かれた『海濱故人』を相對化して讀む上では、たいへん參考になつた。尙、日本では土屋肇枝「二つの海濱故人——「海濱故人」と「女生・婦人」」(『東方』217號、1999年3月)によつて紹介されている。
- (9) 男性に對する情と女性に對する情は同じものか、それとも違ふものかという問題は、『海濱故人』の中でも登場人物によつて論じられている。友人の一人玲玉がかつて、男女共に同じ情で接すると主張していたことを引き合いに出しながら、現實の玲玉が男性への情にのめり込み、自分たち同性の友人との交際が疎遠になつたことを、露沙や雲青が皮肉っている場面が見られる。理念としては男女によつて對應に違ひはないと考えているものの、現實には違ひが生じてしまうことへの諦念が、廬隱にはあつたのではないだろうか？『海濱故人』と同時期に書かれた短篇小説『麗石の日記』(1923年)には、仲が良かった女性同士の友人二人のうち、一人が異性ととの交際を選ぶことによつて、それまでの二人の關係が崩壊し、その

失意から死んでしまう女性が描かれている。廬隱の小説では、男女いずれに對するかによって情の捧げ方が異なることについては、否定的な文脈で現れることが多い。

- (10) 求愛を拒絶も承諾もせず、戀愛を巡る男女關係でヘゲモニーを握ろうとする女性像については、拙稿「廬隱『象牙の指輪』に見る戀愛の「技法」——イエスとノーのはざまで」（早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第24期、1998年12月）を参照されたい。『象牙戒指』『女人の心』等の後期作品と比べて、初期作品『海濱故人』は戀愛相手の男とのヘゲモニー争いというより、戀愛一般との關係の在り方に焦點を合わせており、戀愛の描かれ方としては極めて觀念的な印象を受ける。
- (11) 梓青が本當に離婚を實現すると、露沙には彼からの求愛を拒絶する理由がなくなってしまう。小説中で露沙は離婚を思いとどまらせる理由に、妻に對して氣の毒だと述べているが、それとは別に梓青が既婚者であるということこそが、二人の關係が戀愛ではないという露沙の言い譯になっているとも考えられるだろう。尙、長篇小説『象牙戒指』（1931年）でも、交際相手の男に妻がいることこそ、自分は彼の友人の一人に過ぎないと言える根據だ、と女性の登場人物が述べている。この點については、註（10）に挙げた拙稿を参照されたい。
- (12) 「海濱故人（海邊の友）」という呼稱は當然、かつて海邊で共に遊んだ仲間全員を指すだろうが、音信不通の露沙を想うこの場面では、露沙一人を指していると思われる。尙、廬隱自身は『寄燕北故人』『寄梅窠舊主人』（1926年）等の書簡體の體裁をとる散文中で、この「海濱故人」を自稱として使用している。1925年に郭夢良と死別した後、廬隱がどのような形で自分をかつての「抱負」を繼いでいると意識していたのか、興味深いところである。